

森林文化講演会報告

社叢（鎮守の森）と企業の森の共通性と森のすがた 講師：東京農業大学教授 濱野 周泰氏

平成22年11月7日（日）13時半～16時 桜美林大学PFC



森林文化部会では、H21年度に続き講演会を企画、会員以外にも広く一般の方の参加を募り開催に向けて奮闘をした。参加者は81名（会員49名・一般32名）で連続（H21、22年）で参加して下さった方も多く講演会開催の目的は達せられたと感じている。

今回講師にお迎えした濱野周泰氏は、昨年（H22年）3月10日に大風で倒れた鎌倉・鶴岡八幡宮の大銀杏を再生するためにご尽力されている現役の大学教授で、多方面で自然環境保全の活動をされているため、超多忙の中を調整してやっと実現した講演会である。

H21年度同様、この森林文化講演会には神奈川県、相模原市、神奈川森林協会、（財）かながわトラストみどり財団、（財）相模原市みどりの協会から後援をいただいた。

国土の66%が森林（土地の利用に恵まれない所）である日本だが、植物の成長に好都合な気温の上昇と降水量の増加が同調していて、樹木が大きく成長する条件が整っている。また日本は変化に富んだ森がある。

「亜熱帯から亜寒帯」の気候、「平地から高山」の地形気温が樹木の分布を左右するなど、様々な森のすがたがあることが理解できた。森の働きにおいても、経済競争をすると負けてしまうが、第一次産業における物質循環の要であること、森の災害、劣悪環境からの保安機能があること、森の景観が観光資源として間接利用されるなど話された。森づくりについても、森と関わるには森（樹木）の生活時間で考えることの大事さを話された。森に人が関わらなくなると自然環境に応じた極相へ進むこと、人が関わらない禁足の森としてその地域に即した植物が生育している森が社叢（鎮守の森）であること、人の関わりで極相への時間を短縮した森が明治神宮の杜（*）であることなど、プロジェクターで写真や図を示して説明して頂き納得できた。（*）森：木立が多い。

杜：閉ざされた森と解説された。

参加者の多くが関心のあった都市の森については、共通の価値観を持ち、森に関わる活動を通して子供たちに感動を与え、子供の感性を育て、人も生態系の一員であることの認識を育てるなど私たちの活動の参考になるお話であった。また企業の森については、社会的責任として森の造成や整備を

行っているが企業の目的は営利であり業績が悪くなれば撤退するので短い目でしか森を見てないと話された。

自然環境に沿った森づくりの計画では、土地のそのままの地形を利用した森づくりや土地の生育担保能力と土地（環境）に適合した樹木による樹林再生など実践例を示しながらお話いただいた。

質疑応答では、鎌倉・鶴岡八幡宮の大銀杏について、適期を過ぎた萌芽更新の方法について、などの質問に答えていただいた。

講師自らの体験から得た貴重なお話が、私たちのこれからの活動の参考になればと願う。この講演会にご協力いただいた講師、参加者の皆様、桜美林大学、後援をいただいた各機関に感謝の気持ちでいっぱいである。

講演の内容（講師作成のレジュメより）

はじめに

- 1 日本は森の国
- 2 気候帯に応じた森のすがた
- 3 人の生活と森の働き
- 4 人の関わりと森づくり
- 5 社会的資本としての森
- 6 継続可能な資源としての森

おわりに

